

令和3年度 第1回小田原市社会教育委員会会議概要

- 1 日 時：令和3年（2021年）5月20日（木）14：00～16：00
- 2 会 場：小田原市生涯学習センター本館 視聴覚室
- 3 委 員：木村議長、笹井副議長、有賀委員、金子委員、倉澤委員、齊藤委員、高橋委員、深野委員、箕輪委員、村上委員、山岸委員
- 4 職 員：柳下教育長、鈴木文化部長、尾沢文化部副部長、湯浅生涯学習課長、藤澤生涯学習課副課長、八田生涯学習係長、林主事、内田文化財課長、佐次図書館長、澤地スポーツ課長、杉崎子ども青少年部長、吉野子ども青少年部副部長、柳澤子育て政策課副課長、菊地青少年課長、下澤教育総務課長（事務局）中村生涯学習課副課長、相澤主査

5 傍聴者：なし

6 概 要

1 委嘱状交付

柳下教育長から委嘱状を交付した。

2 教育長挨拶

柳下教育長から挨拶をした。

3 委員紹介及び職員紹介

資料1・2に沿って、委員及び職員から自己紹介をした。

4 報告事項

(1) 附属機関への委員の推薦について

資料3に沿って生涯学習課長が報告をした。

(質問無し)

(2) 令和3年度主要な社会教育事業の予定について

資料4に沿って各所管課長が報告をした。

(質問無し)

(3) 2030ロードマップについて

資料5に沿って生涯学習課長が報告をした。

- 【深野委員】 家庭教育支援について、2030年の目標が、「保護者の4人中3人が子育て環境や支援に満足」となっているが、現状は4人中何人が満足と感じているのか。また、2030年の目標とのギャップ、ギャップの穴埋めのための課題は何であると考えられるか。
- 【生涯学習課長】 現状については、生涯学習課では把握していない。課題についてであるが、今、親が孤立している家庭が増えているという話を聞く。今までは大家族で、祖父母がいたり、近所に子どもが同級生のお母さんがいたという状況だったものが、段々子どもの数が減り、核家族化が進むことで、親が誰に相談したらよいか悩むことが課題になってきていると想定している。地域、学校、社会全体がそのような親に対してどういうアプローチをしているのかということが、より大事になってくるのではないかという見立てのもと、この家庭教育支援が市長の政策集に書かれたのではないかと考えている。
- 【子育て政策課副課長】 子育て満足度の現在の状況については、ロードマップの中にも書かれているが、子ども子育て支援事業計画を策定するにあたって、作成の前年度に、子育て政策課のほうで、未就学児や小学生の保護者を対象にアンケート調査を実施している。これは平成30年度に実施したものであるが、その中で、地域における子育て環境や支援の満足度について回答をいただいている。今回未就学児の保護者を対象にしたアンケートの回答比率になるのだが、平成30年度の時点で、約66.5%の方から満足していると回答いただいた。4人中3人という、75%であるが、少なくとも70%を目指していきたいと考えている。
- 【深野委員】 現状の満足度はもっと低いと思っていた。50%を切るくらいしか満足していないかと思ったら、66%が満足しているという説明であったが、そうだとすると、あと9年後の目標としては志が低いのではないか。85%や90%を目標に掲げて欲しいというのが感想である。
- 【笹井副議長】 今の質問に関連して、一つは、家庭教育と社会教育を混同する議論がある。家庭教育とは家庭の中での話で、親や保護者が子ども達をどう育てるかという話である。例えば母親だけを対象にした母親学級などは親子の関係ではないから、社会教育である。そこを区分けして議論した方がいいのではないかということが一つある。もう一つ、教育というと、意識や行動を変えるという意味合いを含む。子育て支援というと、主として条件整備ということ。家庭教育というと、親の意識、子どもの意識を変えるという話になるので、かなり難しい。もともと家庭教育支援や子育て支援は1990年代の終わりに森元総理が言い出した。本来家庭内のことは各家に任せておけば良いのだが、そうは言っても社会のため、子どものためには口を出さねばいけないのではないかという問題意識があり、今に至っている。2000年に入って、全国に子育て支援部が多くできてきた。本来的に

は、私が子どもの頃などは、子育てや家庭とはプライベートなものだという意識があり、行政は家庭の支援はしてくれず、親が全部していた。そうはいってもひどい状況に置かれている子どもがいる、子どもは育てて社会を支える人たちになるのではないか、このまま放っておいたらひどい社会になるという議論があり、公がもっとサポートすべきとなった。プライベートと公の兼ね合いが難しい。特に教育という、意識を変えるとか行動をより良く変えるという面をどうしても持つので、行政がどこまでサポートなり制限できるのかということはかなり難しい問題がある。その辺は子育て支援の部署または小田原市民の意識と整合するようにやっていかないといけない。

【倉澤委員】 家庭教育支援については、これまでも課題が大きかった。支援の必要性は感じているが、具体的なところがなかなか進められずにいる。保護者の方が孤立化していくということがこの資料にも出てきており、2030年を目指してより具体的なロードマップを作成していただければと思う。

【村上委員】 倉澤委員がおっしゃったように、学校でもアプローチをしているが、なかなか家庭に浸透していかない。経済的面の課題もあるかもしれないし、親の教育に対する考え方も多様化している。いろいろな分野で意識の高揚を図らないと、家庭の教育力は上がっていかないのではないかと感じている。具体的にどうしたらいいかというのは難しいところではあるが、様々な立場から議論を活性化していくしかないと感じている。

【箕輪委員】 家庭教育について、教育という言葉が入ってくると、どうしても小学生以上というイメージを持ってしまう。家庭への支援であれば、マタニティーの時から支援が重要ではないか。これからの社会についての幅広い視点を持ってもらえる機会を設け、親にたくさんの気づきが生まれるという方がよい。家庭が立ち上がっていく時からずっと寄り添っていく教育がないと、子どもが学校に入ってから突然支援といわれても、家庭は作られてからすでに6年7年も経っているから、そこで親の考えや子どもの育ってきた環境を変えるというのは難しい。もっと前からの手助けが必要なのではないかと思った。先導的な取り組みの4項目の中に子育てと防災は入らないということだったが、逆にそちらを先導的な取り組みに入れて欲しかった。

【山岸委員】 家庭教育については、途中からというよりも、家庭が出来たところから、どんな家庭にどんな支援があるかということを理解していただくことが、子育てがよりスムーズに進むことなのではないかと思う。その仕組みを考えていくことが、議論の出発点になるのではないかと感じた。

【有賀委員】 家庭教育支援について経済的な面から考えると、今私が関わっている放課後子ども教室については、支援の環境が整っているのではないか。放課後児童クラブについては有償の取組であるが、放課後子ども教室は無償

でスタッフが学習支援をするような環境が整っている。今活動は行ってないが、できれば、短い時間でも放課後からそのまま学習できるという環境を整えてもらえたらと思う。

【齊藤委員】 国連の子どもの権利条約の内容を具現化する、子どもに優しいまちづくりという考え方が世界的に推奨されている。これから地区公民館のことを議論するにあたって、小田原には地区公民館がたくさんあるので、放課後支援に合わせて、例えば土曜日の朝9時から12時まででは来ていいよなど、土日の学校以外の子ども達の居場所としての機能を果たしていく必要があるかと思う。働く親として、0歳から保育園に入れて育てていた私からすると、現代は親がいない時代になってきていると言える。母親自身は社会では活躍できるが、子育てがうまくいかないという罪悪感を持つ。そういうことは誰にでも起こりうることであり、母親だけではなく、父親もコロナ禍で大変な状況であるので、家庭がすさんでいくということがある。一方で、未婚や、離婚をしているなど様々な家庭がある。35才から45才男性の約半分は独身というデータがある。これからは、独身の方や、結婚して子育てしていない方も子育てに関わっていく時代に入っていくと思うので、地域みんなで子育てしようという認識を持てるようなれば、地区公民館を再生させる未来が見えてくるかなと思う。

【高橋委員】 今小田原のほとんどの学校でスポーツ開放が実施されているが、特に土日はクラブ主体で開放している。クラブに属してなくて、広いところで遊びたいという子は、そこに入っていけない。体育協会としては、月1回でもいいから、一般の人が自由にグラウンドや体育館を使えるというスポーツ開放を取り入れて欲しいと要望している。地域の中でスポーツに長けた方や時間の許せる方たちに見守りをしてもらい、子ども達が何の縛りもない形で、グラウンド等で一日汗を流す。月1回でもいいから、そのような純粋な一般開放の場を設けていただけたらありがたいと思う。

【教育総務課長】 学校開放については、教育総務課で担当をしているが、それぞれの学校の事情等を踏まえながら検討をするという面がある。自由に開放をと言っても、何かあった時の対応を考えながらやらなければいけないということもある。学校開放については、新型コロナウイルス感染症対策から、地域の方やスポーツ関係団体の方にも御協力をいただきながら、一部中止にした期間があった。教育委員会としても、地域とともにある学校としても、学校開放について、今後どういったありかたがいいのかは、校長会等も含めて検討していく必要があると考える。

【金子委員】 最近子どもが少なくて、自分の子どももすでに手が離れて久しい。近所の子ども会には17人しか入っていない。コロナ禍で地区公民館も空いているので、いつでも使ってくださいと声をかけてはいるのだが、全然来ない。それがいいのか悪いのかはわからないが、学校でも放課後の子どもの居

場所があるので、私の地域では子どもの居場所が無くて困っているという話はあまり聞かない。自分が仕事を辞めて、地区公民館の館長の役割だけになったら、管理人になっていつでも地区公民館を開けていたら人が集まってくるのではないかとは思っている。今は責任者と子ども達が一緒にないと地区公民館を使えない形になっている。申し訳ないが、子どもの教育と家庭については、今あまりよく知らない立場にいる。

- 【木村議長】 口では簡単に家庭教育支援といえるが、家庭によっていろいろな事情を抱えているので、あまり行政が深く突っ込んでいくと後が大変である。ロードマップ全体については、これはこれでよいと思うが、個々の取組については、ある程度慎重にいかないといけないと思うので、そこはよろしくお願いしたい。

5 協議事項

(1) 地区公民館について

資料6-1・6-2に沿って生涯学習課長が説明をした。

- 【深野委員】 地区公民館を十分活用できていないというのが一般的な認識ではないか。先程金子委員もおっしゃっていたが、現状、鍵を借りて管理をし、閉めて帰る。だから子どもが放課後ちょっと寄って地域の人とおしゃべりして帰るといった環境にはない。誰かが地区公民館を管理しなければいけないというのが現状である。利用するには、団体という形を取らざるを得ない。地区の人なら誰でも自由にいつも来ていいですよという状態にはなっていない。今の状態の延長線上、つまり管理をする人がいるという前提で考えるのか、フリーなスペース、つまり普通の開放された公園と一緒に考えるのか、地区公民館はどちらを目指すのか。それによって、企画する内容が違ってくるのではないか。意図を持った企画者がいて、その人達が主導して人を集めるという動きしか成立しないとすると、その壁を破るのか破らないのかが非常に重要ではないかと考える。

- 【木村議長】 深野委員がおっしゃるように、現在と同じように、これからも管理者は置くとする。誰でも地区公民館を勝手に使ってというやり方は、これからはならないだろうと思う。ある地区公民館では学習塾の業者からお金をもらって貸館をしている。また、地元の人には集まろうという気持ちがありません。昔であれば、卓球や囲碁をやったり、小学生が習字を習ったりというような地区公民館活動があったのだが、今はなかなかそこまでいってない。

- 【金子委員】 業者が地区公民館で学習塾をやっている例はある。それが公民館の重要な資金源になっている。サークル活動については、会員の年齢が上がって行って、活動をやめていく人達もいる。コロナ禍でサークル活動を休止す

ると、そのまま辞めてしまう人もいる。コロナの影響もあり、平成10年代に比べると、踊りや民謡など、いろいろな活動団体がなくなっているのは確かである。

【木村議長】 地区公民館はあるが、それをどう生かすのか。昔は、地区公民館にはそこでいろいろなことを教えるという生涯学習の場という役割があった。今はそうではなく、地区公民館を学習塾に貸すなど、だいぶ様相は変わった。学習塾が土日の予約を押さえてしまい、地域住民が何かをしようとしてもなかなかできない。しかし、地区公民館を維持するためには資金が必要である。その辺をどういう形でやっていくのか。地区公民館は地域でお金を出し合って建てているので、行政がこうしなさいとは言えない。痛し痒しなところもあるし、そうかといって地区公民館が古くなったら行政にお願いをして資金を調達してもらって建替えるということをやっている。地区公民館の役割については、地域の人が自分たちで考えないとなかなかできない。

【深野委員】 私は、仙台で東日本大震災を体験している。小田原に帰ってきたときに、自治会から体験談を話してくれと言われ、寺下自治会の集会所で話をした。すごく多くの人が集まって、会場がいっぱいになった。自治会の方が関心をもって、地域の人たちが関心のあるテーマで何かを企画すれば人は集まると思うし、地区公民館という場所を活用しようとも思う。地区公民館は自治会が管理しているケースが多いと思うので、どうやって自治会自身が地域の課題を掘り起こし、その解決策になるようなテーマを提示して活動するか。自治会自身の企画力を作り上げていくことも、地区公民館の活動を活性化させる近道になるのかなと思う。行政としては、例えばこのロードマップを宣伝するのに使うとか、こんなテーマはいかがですかと自治会側に提示するとか、何かそういうことはないのか。

【木村議長】 生涯学習センターに各地区の人を集めて何か講座をやる、それはそれで一つの方法であるが、そうではなく、各地区公民館に出向いて行ってそういう催しをしたらいいのではと思ったこともある。そうかといって自治会に任せると敬老会や年寄りのお茶会などに固守されてしまう。私の地区は富水なのだが、小田原市でも子ども会がだいぶ無くなってきており、16自治会のうち、2つしか子ども会がない。先ほど高橋委員がおっしゃったように、土日に小学校で子どもを集めて何かしようかといったときにも、クラブが全部押さえてしまっていて、そこへ全然関係ない子どもたちが飛び込んでいってもおそらくできない。その辺も考えないといけない。お年寄りのことは各自治会でいろいろ考えてくれている。ところが子どもとか、地区公民館には昔からこういう役割があったのだということには目が向かず、地区公民館を維持していくためのお金へ目が向いている。

【笹井副議長】 今は管理社会といわれていて、いろいろなところに責任の追及をする人達がいてみな怖気づいてしまっている。最近では、危ないからということで公園のブランコを撤去したり、学校でも彫刻刀を使う版画はやらないというように、リスクを回避するようになっている。みな管理責任を追及されたら怖いと思っている。日本がリスク回避型社会になっていくと、大人もそうだが、子ども達の想像力がどんどんなくなっていく。子どもは放っておいたほうがいろいろな遊びを発明する。現在の日本には、子どもを放っておいていい場所が全然ない。せっかく小田原には地区公民館という財産があるのだから、そういうことに使えないかなと思う。他のアジアの国にいくと、昔ながらの縁側に座っている人がスイカ食べていかなかったと大人にも声をかけて来たりする。地区公民館がそこまでの昔ながらのふれあいの場になるには難しいのかもしれないが、もう少し地域の人たちが自由に使える場になっていいのではないか。小田原は公立の生涯学習センターがあるが、それは統合的に市全体の事業として講座等を行っているのだから、地区公民館にはもっと別の、フリーな役割があっているのではないか。深野委員がおっしゃるように、誰が管理責任を負うのかという問題は残る。これについては、町内会や、名称は何でもよいが、例えば公民館何とか責任者等を作って、謝金を払って管理することができればよいのではないか。地区公民館で講座をやるのはよいが、それだけではもったいない。例えば何曜日何時からはフリータイムにして、誰が来てもいいですよとしたり、例えば日曜日は子ども達がいつ来てもいいフリーな時間を設けることによって、そこがフリーな場になる。二者択一ではなく、この時間は今まで通り団体で使うが、それとは別にフリーな時間も設けるというように、時間をうまく配分し、柔軟に運営していくのがいいのかなと思っている。

【有賀委員】 自分が関わっている活動事例であるが、今板橋公民館で月 2 回活動している「からたちハウス」について紹介する。私はスタッフの一員であるが、このハウスは、子ども達の成長と自立を支援する第三の居場所ということで、今から 3 年ほど前に開設された。スタッフは元教員を中心としたボランティアで運営されている。現在 15 名程の参加があり、子ども達の参加費は無料である。コロナ禍ということで、今は食事の提供はなく、子ども達は学習したり、ボランティアによる紙芝居やバルーンアートを楽しんだり、思い思いの時間を過ごしている。当初は小中学生とスタッフのつながりだけだったが、最近、活動を耳にした若い御夫婦とそのお子さんが来てくれて、雰囲気がすごく明るくなった。その小さいお子さんは子ども達とボランティアに囲まれてのびのびと遊んでいる状況である。前回はさらに、その情報を耳にした近所の大学に通う男子大学生 2 名が来てくれた。若者の参加は新鮮であったし、子ども達も若者と年齢が近いため

すぐ打ち解け、楽しい時間を過ごした。また、昨年中学生だった子が今年高校生になったことで、参加者については、小さい子から高校生、さらに大学生が加わり、我々スタッフと若い御夫婦、ボランティアと、まさに異世代交流の場で、お互い元気になれるような楽しい場所になっていると感じる。少し前には、おだわら子ども若者教育支援センター「は一もにい」の青少年相談員の方の訪問があった。今後そのような機関との連携も視野に入れて活動が続けられたらと思っている。居心地がよく楽しい場所には自然に人が集まり、つながりができるのだと思う。コロナ禍でも可能な出会いの場を大切にしていずれも活動していきたいと思っている。

【木村議長】 小田原には 128 館の地区公民館があるが、全ての館が平等に同じように活動するのは無理だと思っている。一方で今有賀委員がおっしゃったように、板橋公民館では地区公民館活動に大学生も入ってきてくれている。そうかといって、他のところも同じようにできるかといえば、なかなかできない。また、笹井副議長がおっしゃるように時間を区切ってやるというと、みんなに鍵を持たせるわけにはいかないので、鍵の開け閉めをする管理者が必要になる。そういうことを考えると、どうやっていくのがいいのか難しい。せつかく各地区に地区公民館があるので、使わない手はないというのはわかっているのだが、それをどうやっていったらいいのか、そこをざっくばらんにみなさんとフリートークできればと思っている。

【齊藤委員】 緩やかな気軽なフリースペースというのはよいと思うが、先ほどから出ているように管理の問題があるので、月 2 回程度など、無理のない範囲で行えればよいのではないかと。統一的な言葉を作ることがいいか悪いかはわからないが、例えば子どもの日を設定して、わかりやすくのぼりを作って地区公民館を開けるなど。神奈川大学がある横浜市神奈川区の例でいえば、主任児童委員がそれを担っている。主任児童委員は民生委員の下部機関であるが、年齢も子育て世代よりも少し上なので、子育て経験のある母親たちが、子どもの日ということで、子育て支援をしている。神奈川区の場合、子育て支援は乳幼児に特化している。個人的には、保育園、児童期の環境としては恵まれているのではと思うが、中高生の居場所が無いと思っている。部活になじめる子は学校教育が充実しているよいのだが、そうではない子もすごく多い。小学生も、放課後支援が充実している小学校区だったらよいのだが、そうではないところももちろんある。一方で、中高生の居場所の問題はずっと課題になっているので、子どもの日は幅広い子どもの日ということにするとよい。小田原にどのような組織があるのかわからないが、そのような方たちに、この日はお願いしますということができれば、定着していく可能性がある。地区公民館は 128 館あるので、まずは 5 館か 10 館から始めてみるとか、子どもを大事にする地域の雰囲気を作るといいのではないかと。一方で、ロードマップを見ると、大

学生の参入や、大学と地域をつなぐ等が書かれている。私自身大学に勤める者として、大学生は地区公民館の運営を担ったり、一部講座を担当することをやりたがっていると感じている。今コロナ禍で学生はみんな寂しい状況が続いており、居場所を欲しがっている。講座をやるなどではなく、ただリラックスしてみんなでおしゃべりしたり、ゲームをしたり、些細なことでもいいので、フリースペースでのゆるやかな交流を欲しがっている。大学生は今毎日家に引きこもっており、特に取り込みやすい時期であると思うので、そのような取り組みを始めてみるというのではないかとと思う。

【木村議長】 小田原市では地域にまちづくり委員会が出来ている。その中には子ども達を集めてご飯を食べさせるところもあるし、いろいろなことをやっているのだから、そういうところとタイアップして地域の子もたちをなんとか巻き込めればというのも一つある。ただ、何かをやろうというと、みんな喜んでくれない。また押し付けられると感じる。現状、市内 26 の連合会でまちづくり委員会ができはじめ 10 年以上たっている。今コロナ禍で人を集めることがなかなかできない状況で、しかたがないところもあるが、自治会の役員も 1 年か 2 年で交代するので、去年 1 年間コロナ禍で活動が出来ず、今年もこのまま活動出来ないと、みんなが以前のことを全然わからなくなってしまう。地区公民館を使いながら、少人数で細々とでもいいから活動を続けていかないと、みんなが一からやらないといけなないので来年は大変である。せっかく地区公民館があるので、何か活動をした方がいいが、今は大人数を入れるわけにもいかない。地区公民館は全部自分達で決めて対応しなければならないので、お客さんがたくさんくると対応しきれない。そうかといって、あなたは来ていいけどあなたはだめですよとは言えない。いろいろなことを考えながらやっていかないといけない。本当は子どもが遊ぶ時間を作ってあげたいが、地区公民館の近所に住む人から、子どもが騒いでうるさいとか、カラオケクラブに夜歌われると困るという苦情が来ると、じゃあやめようということになり、活動がどんどんなくなっていく。地区公民館をどうしようかということもあるが、地域の人も、地区公民館を使うということは、それに付随してこういうことが起こるよということを知ってしてもらわないと、活動する人がだんだん疲弊してくる。怒られるくらいならそんな活動しない方がいいになってしまう。第 2 回会議、第 3 回会議で、みなさんと相談しながらいい方法を考えられたらと思っている。箕輪委員は、地区公民館を利用したことがあるか。

【箕輪委員】 子ども会で打ち合わせやイベントで使っている。確かに、団体だから使えているという部分はある。先ほどからフリースペースの話が出ていて、なるほどと思って聞いていた。自分の地区にはいつも開いている駄菓子屋

がある。いつも開いているから、子どもが自然に集まって、段々子どもの輪が広がっていくという感じで、子どもの居場所としてはとても充実している。子どもの立場から見ると、いつの何時と決められても、都合が悪い子はいけない。先ほどの話を聞いて、今子ども達に必要なのは、いつでも開いていて好きな時に行って好きな時に帰れるという場ではないかと思った。地区公民館もみんなが知っているわけではないけど、使っている人は使っている。地域みんなのものであるというところに立ち戻るためには、幅広い人が関わってくれないといけないのではないかというのが印象である。

【倉澤委員】 自分は今自治会の組長をやっており、地区公民館も使う。そこでは、会合や団体サークルの活動の場として使っていることが多くて、フリースペースという場所にはなっていない。自治会で管理していくとなると、管理がかなり厳しい。責任がある以上、安全にという視点が常についてくる。そうすると、地区公民館担当者、館長に、地区公民館の事業内容までお願いするというのは非常に負担が大きい。受け身的ではあるが、小田原市から提供される学習プログラムを、場所を提供してやってもらうくらいしか考えられないのではないか。地区公民館という有効なスペースをどのように活用するか、それぞれの館でやっていることを紹介しあうような形で示してもらえると、それを参考に地域のボランティア等の人が考えて動き出してくれるかなと思う。酒匂小学校区でも、はまっこテラスという団体が、子ども食堂をやっている。今コロナ禍で食事の提供はできないが、物資を子ども達に配るという形で、活動は継続している。そうすると、根付いていく。毎月第2水曜は3時から開いている。低学年の子は学校が早く終わるので、早く行ってそこで遊んだりしてフリースペース的に使っていることもある。また、一昨年前自治会長がフリースペースを作ってくれて、一度見に行った。年配の方たちが運営しているのだが、子ども達は室内で遊んでいて、年配の方たちはその近くで見守りをしている。大人と子どもと一緒に遊びだすと交流できるのかなと思うが、そこでは見守りながら子ども達の自由にさせていた。まだ人数は少なかったが、そういう活動を積み重ねていく、根付かせていくのが大事である。ただ、その部分を自治会の役員の方にお問い合わせと言っても、根付かないのではないか。やはり活動する意思のある方、続けられる方と考えると、先ほど齊藤委員からお話があったように、若者や中高生の柔らかい、新しい発想で、地区公民館のスペースを活用する案を出し合ってみることも大事なことだと思う。

【木村議長】 市内でも子ども食堂をいろいろなまちづくり委員会がやりだしている。それらも地区公民館を使って、さらにそこにお年寄りが入ってくるともっと輪が広がる。地区公民館の役割の一つにはそういうこともある。た

だ、128 の地区公民館がまんべんなくこのようにやれというのは無理だと思う。ここですぐ結論は出ないとしても、次回までに各自考えていただければと思う。テーマとしては、地区公民館の役割を再考する、考え直すではないかと思っているが、いかがか。結果を地区公民館に押し付けるわけではないが、社会教育委員会議でこのように検討したということ各地区公民館に知らせて、一つの参考にしていただければと考えている。

【深野委員】 役割という言葉はいいが、「再考する」では抽象的すぎる。今までの話を聞いていると、「活かす」とか「広げる」「再生する」など、行く方向がある程度イメージできる言葉の方がよいのではないか。再考するというと、ただ考えるだけで、何も現状が変わらないというイメージ。

【木村議長】 今疲弊している地区公民館をなんとかみんなで使い勝手がいい状態に持っていきたいと思っている。

【深野委員】 昔はこんな状態で、よかったねという話も出てきていた。また、管理者がいなくなかなかできないという現状はあるが、限定的でもいいからフリーな時間を設けて、それでまた公民館が生き活きとしてくればよいのではないかという話もあったので、地区公民館を「再生する」という表現がよいのではないか。

【木村議員】 深野委員から、テーマについて、地区公民館の役割を「再生する」がよいとの提案があったが、いかがか。

(異議なし)

【木村議長】 それでは、事務局には今後そのテーマで進めていただきたい。

【高橋委員】 私は国府津に住んでいるのだが、国府津には地区公民館がなく、市有の国府津学習館しかない。市有なので、地域の自治会が使うにも、ダンス等いろいろな団体が利用している中に、予約を入れないと使えないのが現状である。昔、自分が小さい頃は、青年団が作った会館があり、そこがそろばん教室などを開き収益を得ていたが、今はなくなってしまった。今地区公民館が 128 館ある中で、そのように維持費を稼ぐために使っている地区公民館がどのくらいあるか調査はしているのか。社会状況が違うので、昔は有料で貸していたが、今は教室としては貸しておらず、場所としては空いているが、使われていないなど。先ほどのグラウンドの話と同じように、月 1 回でもいいからフリーに地区公民館を使えればいいなと思っている。というのも、小学生の登下校を見守る、見守り隊というのがある。これは強制ではなく、時間がある人が子どもの通学路に立って見守るという完全なボランティアである。そうすると、安易かもしれないが、フリーにした地区公民館もボランティアを募れば、月 1 回か 2 回、手を挙げ

てくれるボランティアがいるのではないかと思う。自分たちが小学生の時に近所の大人に見守ってもらってれば、自分が大人になった時にも、近所の子どもを見守る気になってくる。それが大事である。そういう経験が無い人が、年をとってからボランティアで見守りをやるわけがない。小さい時の経験があるから、ボランティアの声がかかった時に協力してくれる。小学生の時にそのような環境を得て、自分に子どもや孫ができたときに、自分もそうしてもらってきたので、今度は協力しようという循環が長年継続されていかないといけない。それが途中で途切れてしまい、今の状態が発生していると思う。その継続というのは、10年20年ではなく、30年40年の継続を見据えていかなければならないのではないかと思っている。

【生涯学習課長】 地区公民館で利用料を取っているかどうかについては、以前調べたものがあり、まとめてがないのだが、基本的にどこの地区公民館も、地域活動は無料にして、地区外の方が利用する場合にはお金を取るケースが多い。先ほども塾の話が出たが、それらの塾を主要な収入源にしている地区公民館も多いということも事実である。それらのことは把握している。地区公民館の歴史を考えると、戦後から昭和30年代40年代に建てられた地区公民館が圧倒的に多く、小田原においては地区公民館の歴史が長く、それ故に、地区のみなさんの拠り所になっている。残念ながら国府津には地区公民館がないのだが、他の地域、特に町中は歩いてすぐのところには地区公民館がある。これは仮説であるが、地域の特性として、特に町中は自分たちの地域にこだわりがあるので、歩いて100メートルもない範囲内に多くの地区公民館がある。これは、小田原の、特に江戸時代から続く御府内と呼ばれる町中の地域の特性かなと思っている。戦後から昭和30年代40年代に地区公民館ができ、ある意味そこがずっと地域の拠点として存在してきたという歴史的な流れがあるのだろうが、現在はその地域の拠点としての役割がだんだん学校に移ってきている。そのような中で、これからの地区公民館はどういう場であるべきかということに改めて考える時期に来ているのではないかということから、今期はこの地区公民館をテーマとしてご提案した。

【木村議長】 時間になったので、本日はここまでとして、次回またみなさんと討議を続けたいと思う。その他事務局から何かあるか。

(事務局から次回会議を8月に予定している旨連絡)

【木村議長】 それでは、本日の社会教育委員会会議はこれを持ちまして閉会とさせていただきます。